

「万の文反古」の二系列

——二つの草稿の存在とその成立時期について——

谷 脇 理 史

て「万の文反古」は西鶴によってある一つの時期に完成された作品であつたのかどうか、ということである。

「万の文反古」は従来一つの完成した作品と考えられ、その全十七章のうちから主として町人の現実生活を切実にとりあげたいくつかの章を抜き出して評論し、高い評価を与えられて来た。しかし「文反古」全体をそれらの数章から帰納してしまうのは、「文反古」をとらえる上で、いささか性急であるように思われる。何故なら「文反古」には、それら数章とは余りにも異質であり、書簡体という形式上の一致をのぞけば、とても同一の意識で書かれたとは考えられないような諸章が存在するからである。つまり現在の「文反古」をある時期に書かれた一つの作品と見て、そこからその時期における西鶴像を描きあげようとする時、半数に近い諸章を黙殺しなければ、奇妙な混乱を招くことにすらなりかねないのである。だが、もしその混乱を内包するのが「文反古」の、又その時期における西鶴の真の姿であるなら、いくつかの章を黙殺することによって一つの虚像を作りあげることが許されないはずである。が、その前に問題が一つある。それは、果し

て「万の文反古」は西鶴によってある一つの時期に完成された作品であつたのかどうか、ということである。すでに「万の文反古」西鶴完成説には多くの疑問が提出されて来た。そしてその集大成とも云うべき中村幸彦氏の「万の文反古の諸問題」^(註1)では、詳細な板下の実証的な検討によつて、「文反古」西鶴板下説はほとんど決定的に否定され、板下のみによつて「文反古」西鶴完成説を固執するのは、無意味とさえ云えるほどになった。しかし中村氏も云われているように、板下が西鶴筆でないことは、この作品が西鶴作でないことと必ずしも一致しない。云うまでもなく、西鶴の草稿を利用して出版屋が営業上の理由から西鶴自筆の板下らしく仕立てて出版することは、十分考えられることだからである。そこで中村氏は二つの基準をもうけて「万の文反古」中の西鶴の作と後人の追加作とを識別しようとする。だが、この二つの基準からそれを結論してしまうのは註2で指摘するような疑問も生ずるはずであり、板下擬筆説ほど決定的とはなりえないようである。さらに、板下擬筆説を一応認めるにしても、だからその草稿となつたものに西鶴以外の手が加わっている

と考えてしまうのは、結論を急ぎすぎているように思う。

確かに板下の擬筆は「文反古」西鶴完成説を否定するであろう。だが、板下の擬筆を認め「文反古」にかなり異質のものが存在しているという事実が、ただちに後人の追加・補作があることを意味するとはかぎらない。何故なら現在の「文反古」は、西鶴の草稿に忠実に作り上げられたものにすぎないかもしれないからである。だから私は今、後人の追加・補作を考える前に「文反古」をもっと別の面から検討してみる必要があるように思う。そしてそれがおのずと「文反古」の草稿は西鶴により一つのある時期に一つの作品と意図されて書かれたのだろうか、という最初の素朴な疑問に関連してくるのである。何故なら私は、「文反古」という一つの作品を評論する時異質の諸章を黙殺しなければ奇妙な混乱をまねきかねないというおかしな事態を、どうしても忘れることが出来ないからである。従つて私はこの小論において、西鶴は現在の「文反古」の草稿になったものを同一の時期に同一の意図を持って書いたのか、という素朴な疑問を抱くことから出発し、中村氏の触れなかった諸点から「文反古」の草稿とその内容、及びその成稿時期等を中心に考えてみたい。

二

「文反古」は西鶴によって一つの作品として完成されたものではなくたかもしれぬと考えた時、この作品に句点のある章とない章とがあるということは、何らかの意味があるように思われる。まずそれを列記すると、

句点のある章……巻一の二、巻三の一、二、三。巻四の一、二、三。巻五の二。

句点のない章……巻一の一、三、四。巻二の一、二、三。巻五の一、三、四。

右の指摘から明らかなように、巻二は句点がなく、巻三、四は句点がある。が、各巻ごとにそのような差異があるだけなら問題はないであろう。しかし、巻一と巻五とにおいて各一章づつ句点をつけられた章があることは、型の整然とととのった作品にしてはいささか奇異の感をいだかせる。

又、「文反古」の各章末には短い評文があるが、その評文の書き出しにも二種ある。つまり「此文を考見るに……」という書き出しと、「此文の子細を考見るに……」という書き出しとである。今、それを各章について見てみると、

「此文を考見るに……」で評文が始まる章

巻一の二。巻三の一、二、三。巻四の一、二、三。巻五の二。

「此文の子細を考見るに」で評文が始まる章

巻一の一、三、四。巻二の一、二、三。巻五の一、三、四。

以上である。この二種の評文の書き出しがあることも一見奇異であるが、さらに今提出した二つの分類を見くらべてみると、そこには偶然的な一つの事実が現われる。すなわち、句点のある章はその評文が「此文を考見るに……」で始まる章であり、句点のない章はその評文が「此文の子細を考見るに……」で始まるという事実である。これは単なる偶然にすぎないのだろうか。あるいは

作品に変化を与えようとして、意識的につくり出されたことなのだろうか。

しかし、各巻毎に、あるいは意図を持って配列を行っていると考えられるのならまだしも、句点を巻一の二や巻五の二につけることによってそれだけ作品の豊かさが増すという訳でもないし、評文の書き出しをこれらの章だけほんの少し変えてみても、大した効果を期待できるはずがない。又、このような細かい点に意識的になる必然性はこの作品をまとめた者にとって全くないとも云える。だから、このように各巻の中間である巻一の二や巻五の二においてまでこの偶然的の暗合があるということは、逆にこれが意識的に計画されたものでないことを証明していることになる。いわばこの事實は、「文反古」の完成者（編集した者や板下の筆者たち）に意識されることなく偶然的に生じてしまったのだと云わなければならないのである。

だが、それではこの偶然的な事實は何故生ずることになったのだろうか。しかし、未だそれを結論する段階ではあるまい。が、ここには、すぐ一つの推測が成り立つはずである。すなわち、句点があり「此文を考見るに……」の評文を持つ諸章と、句点がなく「此文の子細を考見るに……」の評文を持つ諸章とは、草稿においてそれぞれ別のものだったのではないか、そしてそれが一つにまとめられてしまったためにこの偶然が生ずることとなったのではないか、という推測である。つまりこの偶然的な事實は、「文反古」が元来一つの作品として完成したものではなく、二つの別の系統の草稿を一部としてまとめあげたものだというところ

語っているかもしれないのである。

しかし、このような二つの小さな点から指摘した事実のみによって結論を出してしまうことは当然出来ない。ただ少くともこの事實は「文反古」において二つの系列の草稿があったことを予想させるものである。従って、私は今この事実の指摘から二つの系列の草稿の存在を予測し、それらの内容を中心とした検討に入らなければならない。（以下煩雑なので、句点があり「此文を考見るに……」の評文を持つ諸章をA系列、句点がなく「此文の子細を考見るに……」の評文を持つ諸章をB系列と呼ぶことにしたい。）

まず二つに分類した諸章の内容的な特徴を考えてみよう。云うまでもなく「文反古」はある個人に対する書簡の型をとっており、必ずしも物語性に依存することなく一章を形成するのに便であるが、その中には一章の興味の中心が奇談にあると考えられる諸章がかなりある。例えば巻三の二「明て蠟おとろ書置箱」巻三の三「代筆は浮世の闇」巻四の一「南部の人見たも真言」巻五の二「二膳居る旅の面影」である。つまり私がA系列として分類した諸章は、その多くがその中心を奇談的興味に置き物語性に依存していると云える。と同時に、これらの諸章は町人の現実生活とそれ程かわりを持ってはいない。その上A系列の他の諸章も、巻一の二「栄花の引込所」はいささか現実離れのした大町人の話であり、巻三の一「京都の花嫌ひ」は美小人好きの出家の手紙、巻四の二「此通りと始末の書付」は町人の現実をとりあげてはいる

が後述するようにかなり幼稚なもの、又巻四の三「人のしらぬ祖母の埋み金」は悪所狂ひの後始末をたのみ表題の祖母の埋み金を盗んだ話、である。従つて以上のように見て来ると、A系列に分類された諸章は、従来「文反古」的世界として評論されて来たものとは異質のものばかりである。要するにA系列の諸章は、町人の現実生活には余り関心を示さず、説話的興味におぼれ、物語性に依存することによって成立していると云える。

それに対してB系列の諸章には、町人の現実生活を取りあげたものが多い。例えば巻一の「世帯の大事は正月仕舞」巻一の三「百三十里の所を十匁の無心」巻二の三「京にも思ふやう成事なし」巻五の一「広き江戸にて才覚男」である。これらは「文反古」を評論する時に必らずとりあげられる有名な諸章であり、その秀拔さは今更云うまでもないだろう。又、他の巻一の一四「来る十九日の栄耀献立」は、逆に見れば上層町人を接待する中層町人の苦心を取りあげており、巻二の一「縁付まへの娘自慢」は見栄をはる中層町人への警告を中心にしたものである。結局以上の六章は町人の、特に中下層町人の現実生活を中心としたものであり、当然のことながら、物語性に依存しておらず、その興味を中心を説話的興味に置いていない。B系列のうちに説話的興味に依存したものと云えば、巻二の二「安立町の隠れ家」という敵打ちをあつかつた異色のものだけであり、他の巻五の三「御恨みを伝えまいらせ候」という遊女の手紙にしても「桜よし野山難義の冬」という僧の手紙にしても、物語性に興味を中心が置かれていない。結局、最後にあげた三章をのぞけば全く町人物的

な系列ということになるのだが、作品にバラエティを持たせることを常とした西鶴にとって、この三章の併存はある意味で当然の結果でもあるだろう。従つていささか問題はあるが、B系列の内容的な特徴を見ると、A系列とは逆に、説話的興味や物語性にはとんだ関心を示さず、中下層町人の現実生活を取りあげたり、町人へ警告したりするためのものが、ほとんどであると云うことが出来るのである。

以上、非常に簡単に内容を見て来た訳だが、その結果、二つの小さな事実の存在によつて考えたA、B二系列が「文反古」に存在するという予測は、内容的に見て確證されたと考えて良いと思う。今それを概括すれば、A系列は物語性に依存した非町人物的なもの、B系列は物語性を放棄して町人の現実生活を取りあげたもの、ということになる。

次に「文反古」には、一つの作品として発表しようと思つていたとすれば、全体のバラエティを何時も考慮していると考えられる西鶴にしては珍らしく、趣向や内容の同じものが同一作品中に二カ所用いられているものとして三例ほど指摘出来る。この「文反古」の場合は「日本永代蔵」の場合に見られるような長文の一致はないがまず全体の趣向として似ていると考えられるものに、巻四の二「此通りと始末の書付」と巻五の一「広き江戸にて才覚男」の二章がある。これらの二章は、ともに故郷において失敗し親族からも見限られ江戸に下った男が、江戸で一かせぎして相当の身代になったことを一章の中心としている。前者は、これ

から江戸に出たいという従弟に教訓するための手紙であり、後者は故郷の者への報告的なものであるが故に、同一の趣向として非難さるべき程の一致を示していないと云えないこともないが、やはり一つの作品の中に西鶴が置くとは考えられないであろう。そして云うでまもなく巻四の二はA系列に属する章であり、巻五の一はB系列に属すべき章である。

さらに、巻一の三「百三十里の所を十奴の無心」の章と巻四の三にも、同じ趣向が用いられている。(この趣向は巻五の一には出ていない。)巻一の三には、

「今程は一日暮しに朝の間は仏の花を売屋は冷水を売くれかたより蚊ふすべの鋸屑を売宿に帰して夜は百を八文づゝにて茶うり紙袋つぎ申すこしも油断なくかせぎ申候得ども(中略)……皆酒ゆへ身体取乱しおの／＼様にも御やつかいかけ申候只今は五節句にもたべ申さず候」(引用は「定本西鶴全集」より)

とあり、自分のこととして書かれ、巻四の二では、相手にこの位にしなければというので書いているのだが、そこには、

「……朝は七つ起して自髪に髪をゆひ。扱わらんじかけにて碓ふみかうの物ざいの朝夕。夜は細繩をないて荒物屋に売雨のふる日は下駄笠を売やうにして身洗ふにも日当りに水を汲置。湯をわかす事を世の費と覚へ酒たばこを吞とまり。……」

(同前)

とあって、共に酒をやめ早朝から夜遅くまでかせぐ位でなければ、という趣向をもうけている。これも、ほとんど同一の辞句はなく趣向の一致のみであるが、やはり同一の作品に置かれるべき

ものではないであろう。これも巻四の三はA系列の章、巻一の三はB系列の章である。

最後に巻三の一と巻五の四とは、ともに美少人好きの出家の手紙であり、文体も類似している。もし出家の手紙を「文反古」のバラエティのために書いたのであるとすれば、やはりこのように似た趣向のものを二つとも一つの作品集の中に入れるのはおかしいと云えるだろう。これも、元来は別々のものとして存在していたにもかかわらず、それを一つのものとしてしまったためこの稚拙な二章が登場することとなってしまったのだと考えるべきである。そしてこの場合も、巻三の一はA系列に属する章であり、巻五の四はB系列に属する章である。

以上三つの例をあげて趣向の類似を見て来たが、すべて一方はA系列、他はB系列に存在する章であることが解った。従ってこの点からもA、B両系列の存在が確かめられた訳である。

今までは主として内容的な面からA、B両系列の存在を確かめて来た訳だが、「文反古」にはその他にも二系列の存在を物語ると思われる特徴が、小さなものではあるが二、三ある。これらのものは、もしこれらだけだったら問題はないが、今A、B系列の存在を予測している時、やはりこの二系列の存在を裏付けけるものであるように思われるので以下簡単に記しておく。

まず、「文反古」各章の手紙にはそれをさし出した日付が書かれているが、その中同じ日付のものが二組ある。つまり一つは巻四の三と巻五の一でありともに八月十九日、他の一つは巻五の二

と巻五の三とであり十月二十一日である。元来西鶴はこのような場合にはかなりバラエティを考えている場合が多いようであり、B系列ばかりの巻二、A系列ばかりの巻三、巻四においては、すべてさし出しの日付を変えている位である。又、A、B両系列に分類した時、そこにはどちらにも同一の日付を持つものはない。従って、この二組の類似は、特に巻五の二と三との場合は同一の巻の連続する二章であり、考えてみれば、非常に奇異であると云える。つまり、一つの作品として西鶴が手紙を配列したとすれば、多分このような稚拙なやり方はしなかっただろうと思われる。そしてこの二つの類似において、ともに一方がA系列に属し、他方がB系列に属する章であったことを考えると、この小さな事実も、A、B二系列として別々に存在していたものを一つにまとめた故に生じた偶然的な事態であったと結論することが出来るようである。

次に、巻一はその二のみA系列である巻であるが、この巻には不思議な程巻一であることを強調する姿勢があるようである。すなわち、内題下には「一卷」とあり、目録には「初巻目録」とあり、さらに巻末に「一卷終」と記されている。云うまでもなくこのような強調は他の巻には見られず、他の作品においてもこれ程の強調はない。だからこの事実も、かんぐった見方をすれば、本来一つのものではないA、B二系列の草稿を一緒にして一卷に仕立てた故の強調であり、完成者の一つの作品に見せようとする気持が、無意識的に現われてしまったものだと言えないこともないと思う。従ってこの事実も又、逆にA、B二系列の存在に対す

る傍証として役立つ事実であると云えるであろう。

私は、句点の有無と評文の書き出しとから二系列を予測し、右のように内容的にも又外観的にも、その予測が正しいことを確かめて来た。私はここで「万の文反古」におけるA、B二系列の草稿の存在を設定出来ると思う。最初の二つの小さな事実からだけでは決定的に結論することは出来なかったが、ここで簡単に以上の結論を記しておこう。

「万の文反古」は、結局西鶴によって一つの作品として完成されたものではなかった。これはすでに中村幸彦氏もその板下の研究から結論されたことであり、私の結論と一致することになる。しかし、だからと云って後人の追加や補作があるという訳ではなく、それは性質の異なった別々の草稿であったA、B二系列のものを、一つの作品としてまとめたものだったと考える訳にはいかない。だから、後人の追加や補作を考える前に、まずこれらの次点から後人の手が加わっているかどうかを考えてみなければならぬことになるはずである。ともかくここでまず私は、現在の「文反古」はA、B二つの系列の各章が別々の草稿として存在しており、それを誰かが一つの作品としてまとめたものであると結論しておく。

しかし私は、ここでA、B二系列の草稿の存在を設定しても、どちらかが西鶴以外の者によって書かれた草稿であったなどとおうとするのではない。私は従来考えられていたように、やはり

ど簡単にとりあげておきたい。

このA、Bの草稿とも西鶴のものであると考える。さらに、それらの草稿が現在の「文反古」としてまとめられる時、後人の手が加えられるにしても、それは草稿の内容にまで及ぶものではなく、むしろ全くと云って良い位草稿に手は加えられておらず、草稿を尊重し、その小さな点までも原型のままに保存しようとしたのではないかと思う。何故なら私は、追加や補作を行った者が、このような小さな点まで意識してそうするとは考えられないはずであり、従って草稿に句点が存在したものはそのまま句点を残し、評文が「此文の子細を考見るに……」とあれば、それをそのままの型で残していると考えるからである。そしてそれが西鶴の草稿を西鶴が完成した作品であるとして売り出す時、最も西鶴的なものになると完成者が考えたであろうことは、十分に想像出来ると思う。結局私はここで、現在の「文反古」は、生前に西鶴がA、B二つのものとして書いた書簡体の草稿を、そのどちらかだけでは一つの作品として十分の分量を持っていなかったが故に一緒にし、草稿には忠実に現在の型として仕上げたものだったと結論したい。だから「文反古」は如何に型が整つていようと西鶴自身にあっては一つの作品として意図したものではなかったと考えなければならぬはずであり、それを一つの作品として評論しようとするれば一方を黙殺しなければならないという奇妙な事態が生ずるのも当然だったと云えるのである。そこで、いよいよ私は、以下「文反古」をA、B二系列に分け、それぞれについてその成稿時期等を検討して行かなければならない訳である。が、その前に、A、B二系列の設定により解決しうる付随的な問題を二つは

その一は、各章末にある評文補作説についてである。すでにこの評文は団水の補筆であろうという山口剛氏(註8)を始め、その中に稚拙で添え物的なものが多い関係上、後人の補作ではないかと考える説も多かった。しかし、最初に指摘したように句点の有無と評文の書き出しとは非常に密接な関係を持っており、これを意識的に行ったとは考えられないから、A、B二系列を設定することにより、明らかに本文の作者が評文の作者であると、この点だけからでも結論出来るはずであり、多くの疑問は否定されねばならない。そしてこのような評文をつけ加えないではいられなかった西鶴の気持については、暉峻博士の「老熟した指導的・解説的態度が、やがて本来簡潔なる書翰体に従つたことによつて、いよいよその簡潔さをました「文反古」の諸短篇に、解説的な短文を添へさせたのである」という言葉につくされているようである。(註9)

その二は、「文反古」が都の錦の「元禄太平記」巻三の二「写本料にてめいわくに候」に云う「好色浮世躍」に擬せられている説についてである。しかし、すでに「文反古」は一つの作品として完成していなかったという結論が出ている以上、暉峻博士の云われるように、「文反古」が書肆に渡されておったことは出来ない。とすれば、「文反古」を「好色浮世躍」として書いたのかどうかということが問題になる訳である。だが、内容的に見て好色物の要素が少い「文反古」を「浮世躍」として書いたとは、いささか考えにくい所である。さらに、戯作であるにすぎな

い「元禄太平記」をそれほど信用することは出来ないが、もしそこで云う説をいささかも信じ「少しさはる事がありて、草案を仕直すによつて思ひの外隙をとる」と云つて「半年ほど引きしらふ内に西鶴此世を去^(註10)」つたとすれば、後述の「文反古」の成稿時期から考えても疑問である。だから「半年ほど引きしらふ内に西鶴此世を去り」という言葉を信じれば、「浮世躍」として書いたものは、一応西鶴の遺作であると考えられている「西鶴置土産」を擬すべきであろう。その上「置土産」は最晩年の西鶴には珍らしく好色物的な要素を多分に持ち、「好色浮世躍」を書肆に求められたということを考慮に入れれば、内容的にもかなり近似したものであったと云える。又、西鶴が自分で「西鶴置土産」という名をつけたとは考えられないから、これは団水か書肆が命名したものであろう。そして今「置土産」の原題は何であつたかを考える時「置土産」の西鶴の序文が暗示的であるように思われる。すなわち序文の最終部には「万人のし連る色道のうはもりなれる行末あつて此外になし是を大全とす」（傍点筆者）とあるのだから、この序文から考えれば、「置土産」の原題を西鶴は「色道大全」というようなものにしようとしていたのではないかと、十二分に想像出来るのである。従つてこれらの点から、「好色浮世躍」には「置土産」を擬すべきであり、「文反古」はそれとは全く何の関係もない作品だと云わなければならないと思う。

三

前節において私は現在の「文反古」のもとになったA、B二系

列の草稿の存在を設定した訳であるが、この二つのものは、西鶴によつて同一の時期に書かれたものだと言えらるうか。云うまでもなくその答は否定的なものである。何故なら同一時期に書かれたものであるとすれば前述の句点の有無と評文の書き出しの一致という偶然が生ずるはずもないし、又、内容がかなり異質であり興味のおき所も異なっているというようなこともありえないであらう。従つて「文反古」のA、B二系列の草稿はそれぞれ別の時期に書かれた二つのものであったと云わなければならない。それでは、その時期はそれぞれ何時頃であつたと考えるべきであらうか。まずそれほど問題のないと思われるB系列の方から考えて行こう。

従来「文反古」はそれを一つのものとする立場から元禄三、四年の間に成立したと推定されている。それを最も強く詳細に主張されているのは陣峻博士であると思われるが中村幸彦氏も前出の論文においてそれを支持され、吉田幸一氏の異説を否定しておられる。従つて現在「文反古」は元禄三、四年の間に書かれたと考えられていると云つて良いと思う。しかし、すでに論述して来たように、「文反古」は一つの作品として考えることは出来ないはずである。とすれば、従来どのような章を根拠にして元禄三、四年間「文反古」成立説が主張されて来たかを見てみる必要がある。

陣峻博士は具体的な個々の事実に注目している訳ではなく、西鶴の作品の発展的推移を検討してこの結論を出しておられるが、主として町人の現実生活を主題とした諸章を中心に見ておられ

(註¹²)

つまり私がB系列として分類した諸章である。しかし、大雑把に見ても、西鶴が「日本永代蔵」を成立させる以前に、このような町人のきびしい現実生活を主題とした諸章が書けるとは考えられないから、B系列が西鶴の生前出版された他の諸作品との関連から見ても、元禄三、四年間とされる推定は首肯すべきであろう。又中村氏は前出の論文において「一時に連続して執筆されたかも知れない」とされ、具体的な事実を作品の中に見ても、巻一の四は元禄初年、巻一の三は元禄二年頃書かれたとされている。云うまでもなく巻一の三及び四はB系列の諸章であり、暉峻博士の推定とは一年ほど違うが、これらの諸章が明らかに「永代蔵」の成立以後に書かれたものとされているのである。従って、従来「文反古」が「永代蔵」を成立させ所謂町人物に方向転換して以後の西鶴作品であると考えて来た根拠は、B系列の諸章だけをもとにしていると云えるのである。結局、従来の「文反古」の成立時期に関する説は、B系列の草稿の成立にのみあてはまると云わなければならない。特に、B系列の諸章において、現実の町人生活の中に多くの矛盾を感じ、中下層町人の意識をかかなりの型で把握していることは、西鶴の一つの転回軸である「日本永代蔵」を経過しなければ不可能のことであつたろう。又、それは「金が金をためる世の中」という現実への鋭い把握がB系列の作品においてのみ見られ、A系列のものには全く云って良い位ないという一事からも裏付けられるであろう。私は、ここで、B系列の成稿時期を、従来「文反古」全体の成稿時期と考えられていた元禄三、四年頃と決定して良いと思う。

次に、B系列が「永代蔵」成立以後であるということを確認め、A系列の成稿時期を予想させるものとして、すでに趣向の類似とし指摘した巻四の二と巻五の一とを比較してみよう。この二章は、ともに主人公が故郷において失敗し江戸にかせぎに下り成功をおさめるという趣向を持つが、この二章の作品としての優劣はかなり明らかである。まず全体の構成において、巻四の二は成功者が失敗者に送る手紙という型をとっているため厚みに欠け成功者の自慢話めいた部分が多く、これに稚拙な感じが抜けない。それに対し巻五の一は単なる報告といった型をとっているため淡々としており、物語的に脚色された部分がなくすっきりとしている。しかし、この全体的な感じだけで優劣をきめるのは、いささか強引にすぎ説得力がないだろう。ところが、この二つの章においてかなり重要な働きをするはずの主人公が現在の財産をためるに至る過程を書く部分で、巻四の二では、

「天とう人をころし給はず五六年中に貳千両あまりかせぎ出し……」

と、「天とう云々」のアイマイな表現だけですこぶる簡単に金をためてしまふ。これは考え様によつては、西鶴が未だ「銀が銀をためる世の中」という現実認識をそれほど強烈に持っていなかったことを意味していると云えると思う。それに対し巻五の一では

「……何に取つく島もなく候へども才覚して刻み昆布に取つき……」

と、自己の「才覚」によつてやつとのことではかせぎ出したものであることを強調している。これは、「日本永代蔵」以後、とりわ

け「本朝町人鑑」(織留)巻一と二)で強調している西鶴の意識「金が金をためる世の中」という現実把握とそれ故に「才覚」をもたねばかせぎ出すことは出来ない、とする現実認識と全く一致しているのである。結局B系列の巻五の一は「永代蔵」を経過することによって西鶴が持ち得た現実への鋭い認識をその根底に置いているのに対し、A系列の巻四の二ではそれがなく「天とう人をころし給はず」というアイマイな現実認識しか出来ていない。つまり、このような現実認識の相違が、この二つの章の優劣を明らかにしてしまっているのである。

このように、この両者を比較すれば明らかに巻四の二は巻五の一より前に書かれていることになるのであるが、さらにその時期を限定して考えようとする時参考になるのが、やはり故郷を追われ江戸に下ってかせぎ出すという趣向を持った「永代蔵」巻二の三「才覚を笠に着大黒」である。そしてこの三者を比較した時、明らかに巻四の二は「永代蔵」巻三の二以前の現実認識しか持ちえていないようであり、「永代蔵」のものは、はるかに巻五の一に近づいている。そして「永代蔵」のものと巻五の一を比較すると、「才覚を笠に着大黒」は脚色がかなりうまくいっており作品として非常にすぐれたものとなっているのに対し、巻五の一は淡々とした落着いた感じで、より「本朝町人鑑」に近いと云えると思う。さらに、すでに考えた加くB系列全体は「永代蔵」成立以後ということになるから、巻五の一が「才覚を笠に着大黒」以後に書かれたものと考えて間違いないであろう。結局、以上を総合すれば、巻四の二→「永代蔵」巻二の三→巻五の一

という順序になるのである。そしてそれはそのままA系列→「永代蔵」→B系列という成立の順序を教えてくれるものであると考えられる。それではA系列の諸章は「日本永代蔵」成立以前に書かれたものということになるのだろうか。以下A系列の諸章の草稿成立時期を考えてみよう。

A系列は、すでに指摘したように町人の現実生活よりも説話的興味が中心であり物語性に依存している諸章である。そこで西鶴がそのような傾向を示していた時期をしらべてみると、西鶴が主として物語性に依存していた時期は天和二年の「一代男」より元禄二年正月「本朝桜陰比事」を出すまでであり、それ以後はほとんど奇談的な性質を持った作品を書いていない。従ってA系列の草稿は少くとも元禄元年以前に書かれていたとは云える。だから西鶴のこの傾向を考えた時、「文反古」巻三の三「代筆は浮世の闇」でかなり脚色して奇談的にとりあげたものを、「織留」巻一の二「品玉とる種の松茸」においては、単に挿話的に世間咄程度のもので描いているのは当然と云えるであろう。結局、西鶴が物語性に依存し奇談的興味におぼれていた時期は「永代蔵」前後又はそれ以前と考えられる訳であるから、その事からも、A系列の草稿の成立時期は、その全体的傾向を考慮に入れば、「永代蔵」の成前立後又はそれ以前であると云えると思う。しかしそれだけでは余りに漠然としすぎているであろう。私はその点について他の面からもう少し考えてみたいと思う。

すでに「文反古」巻三の二「明て書く書置箱」及び巻四の一

「南部の人見たも真言」の第二章はそれぞれ「懷硯」巻二「後家に
なりぞこなひ」及び同巻一「案内知つて昔の寢所」の章と全体の
プロットまで一致するものとして有名だが、この二者の間に陣駿
博士が指摘する（註16）ような西鶴の成長を考へるのはいささか無理のよ
うである。この第二章は「懷硯」の第二章を参照しながら、作家的成長
をとげた西鶴が書き直したと見るより、むしろ同一の時期に別の
型をとって書いたものと考えておいた方が穩当であるように思わ
れる。しかし「文反古」における題材の手なれたあつかい方から
考えれば、一応「懷硯」の第二章を書いた後で「文反古」の第二章を
書いたと云えないこともないが、それがそのまま書かれた時期の
時間的へだたりを意味するものではない。かえって「文反古」に
「懷硯」と類似した第二章があることは、「懷硯」として発表して
しまったために「文反古」A系列の発表を留保し、その結果死後
までも草稿として残ったと考えられなくもない。むしろここでは
逆に、この第二章を含むA系列の諸章は「懷硯」が書かれた頃に出
来たのではないかとさえ云えると思う。

さらに「色道大鼓」^{（註15）}との問題がある。すでに板坂氏によって報
告されたように同書には「文反古」巻三の一「京都の花簾ひ」の
章とかなり長い部分にわたり同一の文章がある。「大鼓」のその
文は主として漢文体であり「文反古」のものは書き下しである
が、この両者の一致は不可解であり、板坂氏は「文反古」団水擬
作説の一資料として提出されている。しかし、巻三の一はA系列
に分類された章であり「懷硯」と同一時期に書かれたとすれば、
それが団水のこの書にあることは不思議ではない。つまり吉田幸

一氏の西鶴がそれを団水に与えたとする仮定は^{（註17）}十分可能になるの
である。すなわち氏の「（大鼓の）追加一章を書加へさせるにつ
いて想像すると、西鶴は「文反古」巻三の一「京都の花簾ひ」と
して書くべき素材なる書簡体の草稿が作つてあつた。それを急場
の間に合せて団水に与へ、前後に筋の通るように書かせてみた」
という想像は、A系列の存在とそれが「懷硯」の書かれた貞享三
年末から四年初頃出来たものと考えれば、單なる想像ではなくな
るのである。結局この「色道大鼓」の存在は「文反古」団水擬作
を意味するものではなく、西鶴のA系列の草稿がすでに存在した
ことを意味し、A系列の成稿時期が貞享三年末から四年初である
ことを暗示してくれるのである。

次に西鶴が書簡に対して強い関心を示したのは何時かというこ
とが問題になる。すでに陣駿博士も述べられているように^{（註18）}西鶴は
処女作というべき「一代男」から書簡を巧みに用いており、書簡
体への関心は非常に深いと云える。しかし、西鶴は「男色大鑑」
においてほど多く書簡を利用したことはないのではなからうか。
例示するまでもなく、書簡は非常に多くの章でかなり重要な役割
を持たされて用いられている。そして「男色大鑑」が出版された
のも貞享四年正月であり、「懷硯」出版の直前である。従つてこ
の点からも、貞享三年後半期頃に西鶴が書簡体小説集を意図して
いた可能性は十二分に考えられるのである。

以上いくつかの点からA系列の草稿の成稿時期を推定して来た
訳だが、大体右の諸点の考察から、A系列の諸章の草稿は「永代
蔵」が現在の型で成立する以前、より限定して云えば、貞享三年

下半年期を中心とした時期に書かれたという結論が導き出せると思う。

四

前節までの論究により私は「文反古」のもとになったA・B二系列の草稿の存在を考え、その成稿時期を推定して来た。そしてA系列の草稿は「永代蔵」成立以前の貞享三年下半年頃、B系列の草稿は従来「文反古」の成立時期と考えられて来た元禄二、三年の間頃だと結論して来た。結局西鶴は、この二つの時期に書簡体小説集を意図し、二度とも完成しえずに終った訳である。しかし、この二つの草稿は死後誰かによってまとめられ、中村氏の云うように西鶴自筆を擬装して出版されることになった。だが、私は今ここでその誰かが誰であったかを推定することは出来ない。「色道大鼓」の文章を西鶴が団水に与えたものと考える以上、必ずしも「文反古」に団水が関与していたとは云えないし、又団水でなかったとも云えない。ただ、句点を草稿のままに残したと考えられ、評文の小さな部分までも改変することがなかったこと等から見て、それが西鶴に心服し、西鶴の原稿を一字一句たりともそのままに出版しようとしていた程の人間であったとは云えると思う、とすれば、そのような人間としては、団水が最も適当な人物であると言ふべきだろうか。しかし団水なら一度自分に与えられた西鶴の草稿と同じ内容のものをわざわざ「西鶴文反古」と銘打って出すこの作品にとり入れるとも考えられない。だから逆に、下手に文才などを持たぬ出版屋が、もっぱら西鶴に忠実に出

板することにより西鶴がすでに完成しておいたものであるのかの加く見せかけ、一層の利益をはかろうとしたにすぎないのかもしれない。が、その場合にも西鶴の身近にいた誰かがその完成に力を貸していることは確かだろう。結局私には、西鶴の二つの系列の草稿を誰かがまとめたのだと云う以上の事は残念ながら云えない。従って私はこの小論においては、「文反古」は別の時期に書かれた二系列の草稿により成り立っているということと、その草稿の成立時期を考察するだけに止めなければならないようである。私は今右に行った不十分な考察への批判を待つ以外に仕方がない状態である。

しかし、私はこの非文学的な論稿を終るにあたって、ここで行った追求からいくつかの問題を提出しようように思う。例えば、「文反古」を評論する時それを大雑把に一つにまとめってしまった従来の方方は、二つの系列の草稿の存在を考慮に入れることにより別の見方をされなければならないということ、又、この「文反古」に見られるように西鶴の遺稿に西鶴以外の手が加えられている可能性が多分にあり、当時の出版ジャーナリズムのかなり悪劣なやり方を考慮に入れて、西鶴の作品（とりわけ遺稿）を検討しなおさなければならぬ、ということである。さらに、西鶴という作家は従来簡単に考えられていたように天才的に作品をかきまわるといふやり方を必ずしもしている訳ではなく、多くの場合かなり周到な準備をし草稿を作成した上で改稿をするといふような書き方をしていたのであり、そのような点からも西鶴を見なおす必要があるのではないか、ということなどである。しか

し、これらの問題は、このような小論の末尾で言及すべきではないであらう。私はただ、この小論が、これらの大きな問題を考える上の、一つの参考となり得れば幸だと思ふばかりである。

註1 「国文学論叢第一輯」後に「近世作家研究」(三一書房刊)所収。

2 中村氏は、西鶴作品を識別する基準として①他の西鶴作品と同一内容を持つもの、②「何々づくし」を持つもの、という二つを設けて検討されているが、確かにこの二つは西鶴作品の特徴ではあっても、絶対的なものではありえないと思われる。又、逆に考えれば、これら二つのものは、西鶴を模倣する時最もやりやすいことであり、必ずしも西鶴作品を識別する上で役立つとは考えられないように思ふ。

3 卷二の二及び巻五の三の評文の上には△印があるが、これも後述の事から、草稿に存在していた故に現在の「文反古」に残されていたと考えられる。従つて、西鶴がB系列の草稿を書いている時、この二章を性質の異なつたものと考え、評文に△印を付して区別していたのではないかと想像出来る。だから、B系列のうち、前の町人の現実生活をあつかつた六章の草稿の方を西鶴自身中心になるものと考えていたと思つてさしつかえないように思われる。つまりこれら二章の草稿は、B系列で意図された書簡体小説集のパラエティのために、一応書いてみたものだったのでないか、と云えるのである。

4 後述のようにこの章は、趣向文体等において卷三の一との類似を示しているが、卷三の一が「男色大鑑」に近いのに対し、この章の考え方が、とりわけ「随分世は捨候へどもはなれがたき物は色欲に極まり候」や評文でそれを大らかに認めている態度からすれば「置土産」に近づいていてと云えると思う。従つてこの点からも、卷三の一と巻五の一とは、へだたりがあり、後述の同一作品中におくものとして意図したにはおかしいという結論が導き出せると思う。だから、B系列にいささか性質の異なつたこの章があることも、後述の論究とは矛盾しないはずである。

5 拙稿「日本永代蔵成立への一試論」(国文学研究第二十集)参照。「文反古」の場合同一文の一致がほとんどなく趣向の一致のみであるのは、「永代蔵」の場合のように草稿を参照しながら書き直すという方法をとらず、後述のように別々のものとしてそれぞれの系列を意図した故と考えられる。

6 日本名著全集「西鶴名作集」下巻解説。

7 「西鶴研究ノート」P二五九

8 暉峻博士「西鶴晩年の生活と芸術」(『文学の系譜』所収)他。

9 引用は「浮世草子名作集」P三四九より。

10 「西鶴研究ノート」西鶴著作考。

11 「色道大鼓と西鶴」(『西鶴研究』第八集)

12 A系列の中からもとりあげたものもあるが、『卷三の二

卷三の三、卷四の一）、暉駿博士はそれらを傍証的にとりあげており、それらによって成稿時期を決定している訳ではない。又、それらの章については、後述のようにA系列の成稿時期に出来たものと考えの方が妥当な章ばかりであると思う。

- 13 私は「永代蔵」を経過することによって西鶴がこのような現実認識の変化を経験していると考えるが、この点については、もっと多くの面から考えてみる必要があるのだ、一応このような不完全な要約とどにめ、この点については別の機会に考えてみたいと思う。

- 14 「西鶴評論と研究」下P一三二～一三六。

- 15 刊記について疑問があるようだが、「大鼓」の刊記は「貞享四年丁卯年十月吉日」である。板坂氏は刊記の「部」分は入木の疑があるが、版式挿絵などから推して大体貞享

頃のものであるとして誤りないものである」と云われている。

- 16 「西鶴文反古」団水擬作説の一資料（「文学」一九五五年一月号）

- 17 吉田幸一氏前出論文。

- 18 「日本の書翰体小説」（「文学の系譜」所収）を始めとするその他の論文。

- 19 この点については、不十分なものであるが拙稿前出論文及び拙稿「好色一代男の成立過程」（「近世文芸」第九号）において、いささか考えて来た。なお、西鶴の草子製作法の一つの推測として、すでに宗政五十緒氏「西鶴の後期諸作品についての試考」（竜谷大学「国文学論叢」第十集）の論がある。

紹介

服部嘉香著

「口語詩小史」

はしがきに、「柳虹を中心として動いた口語詩の変遷、発展について、わたくし自身がまたその渦中にあつた体験・実感に基

づいて、その史性を明きらかにしたものである。」とあるように口語詩の論者として第一線にあつた著者が、自身の体験と著者の保存する資料にもとづいて執筆されたものである。内容は本論と余論より成り、それぞれ一、二に分けている。口語詩発生の時代から自由詩完成前期までの展望を本論の一に、柳虹の史的位置と評価を本論の

二に、口語詩の名称、自由詩の名称についての考察その他を余論に収めている。口語詩の理論的指導者・時評家であつた氏によつて、はじめて可能な口語詩の展開史であり、題名は「小史」であるが、内容は「大史」としてよい。次号に書評が掲載されるので、簡単に紹介しておく。（J）

（昭森社・B 6五五〇頁・五五〇円）